

た か し



～子供も大人も幸せになるために～

主幹教諭 小室 純子

9月の道徳授業地区公開講座には、たくさんの保護者の皆様にご参加いただきありがとうございました。子供たち一人一人が自分と向き合う時間を過ごしている様子を見ていただけたのではないかと思います。

この数年間で、子供たちを取り巻く環境は大きく変化してきました。中でも、子供への「声かけ」や「叱り方」は、私が子供だった頃と比べて、ずいぶんソフトになったと感じます。その背景には、脳科学や心理学の進歩、そして個性を尊重するという時代の流れがあります。とはいえ、教育現場では「だめなことはだめ」と、しっかり伝えなければならない場面が多くあります。「叱らない＝何も言わない」ではありません。叱るときに子どもが「自分自身を否定された」と感じないように、できる限り配慮しています。それでも、叱った後に「もっと違う伝え方ができたのでは」と後悔することもあります。同じ思いをされている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。だからこそ、伝え方には常に工夫が必要だと感じています。こちらの思いがうまく伝わらず、ただ「叱られた」という記憶だけが残ってしまうことのないように。

さて、道徳授業地区公開講座の講演会では、東京家政大学の杉山雅宏先生から、前述した「声かけ」や「叱り方」に関する貴重なお話を伺うことができました。杉山先生によると、日本の子供たちは諸外国と比べて「自己肯定感」が低い傾向にあるそうです。「私は私でいい」「私は必要とされている」「私は自分のことが好き」といった感覚が育ちにくい背景の一つに、「悪いところばかりを指摘される」「良いことをしても、それが当たり前とされてしまう」といった文化の存在があるとのことでした。このような自己肯定感が低い状態が続くと、子供たちは「私なんて…」と不安を抱いたり、「自分の考えは間違っているのでは」と自信をもてなくなり、そのまま大人になると、自分を認められず、ちょっとしたことで自分を責めたり、新しいことに挑戦できなったり、すぐにあきらめてしまうといった影響が出てくるそうです。まさに、今よく耳にする若者の姿と重なります。この話を聞いて、改めて「声かけ」や「叱り方」がいかに重要かを実感しました。大人の大きな役割は、子供の自己肯定感を育てることだと思いました。

では、どうすれば自己肯定感を育てられるのでしょうか。それは、大人が子供を論破するのではなく、子供自身が「自分でやりたい」と思える心を育てるということでした。そして、「当たり前のことができたときにこそ褒める」ことが大切なのだと教えていただきました。「そんなの当たり前」と思わず、できたことをしっかり認めて褒めることが、自己肯定感を育てる秘訣です。もちろん、叱らなければならない場面もあります。そんなときは、「1回叱ったら10回褒める」ことを意識するとよいということでした。「そんなに褒められるかな」と思ってしまいますが、特別なことがなくても、日常の中に褒めるポイントはたくさんあります。とはいえ、子どもの行動にイライラしてしまい、当たり前のことを褒める余裕が持てない日もあります。だからこそ、子どもの話をよく聞き、自己肯定感を育てるためには、まず大人自身が元気で、心に余裕を持つことが大切です。大人に余裕がないと、物事はなかなか良い方向には進みません。子供たちの当たり前を褒めて自己肯定感を育みながら、大人も元気に過ごすために自分の時間を大切にしていきたいです。子供も大人も幸せになるために。